

電磁応用

第15号 1985年9月

第13期日本学会議会員

—— 理事平山博氏再選 ——

去る7月22日、当所理事平山博氏は総理官邸において第13期日本学会議会員の辞令を受けられた。同氏は第12期に引き続き再選であるが、会員の選出方法は新制度に基づいて各学会等からの推薦された人々を更に選挙により定員にしぼったものである。

松原晋先生からの便り (60.7.1)

本誌前号を送付申し上げたところ、次のご返事を戴いた。

あの録音は多分私が行い先生に贈ったものです。私もテープを聞き直して見ました。先生の元気なお声をなつかしく感じました。友人の和地氏はすでに亡くなっておられます。

ありし日の恩師の声を耳にして すぎにし会の思い出さるる

メカトロの夜明け (菅原重二氏)

この程菅原研究所の菅原重二社長からお便りと資料を拝受した。氏は昭和17年早大機械科のご卒業である。その一部を紹介すると次の通りである。

先生の58年9月22日の葬儀はややさびしい感じであった。昭和の初め上野浅草の地下鉄開通の宣伝もかねて、上野の4階建ビルの正面に3馬力の同期電動機時計が出現した。これは川原田先生の作品であった。先生を有名にしたのはこの時計ではなくテレビの発明であった。これは失敗作ではあったが、いわばメカトロの夜明けであったと言えよう。

私は海軍の技術士官の頃ジャイロのサーボ調整に川原田式電気時間計を使い、先生と昵懇になった。先生の時間計はメカの為の電気測定器の元祖である。

岡本きみえ女史のこと

前号で岡本女史のことに少し触れたが、その岡本さんより「歌日記しのび草」を拝受した。この中に故理事長について述べられたページがある。

この歌日記を執筆中、川原田先生が58年9月6日ご逝去と知り驚きました。57年の6月頃町田のお宅へお見舞いに伺い、案外にお元気で喜んだのですが、これがお別れとなってしまいました。

終戦後京都の私の旅館によくお泊り下さり、又53年の夏には南紀にも来られ私のあ
ばら家にも泊まっていたいただきました。
人情味豊かなお方のご逝去に心からお悔み申し上げます。

テレビ界の発明権威者川原田先生 この秋ついに逝きたまふかな
あの世にてこつこつ時計いじりつつ 安らぎたまへ川原田先生
折り折りの写真に思いめぐらしつ K先生を偲ぶ秋の夜
病むひとの足をもみつつ哀しかり うなづくのみでもの云へざる (59.9.15)

なおこの本の巻末に47年に「京の宿」を出版されたとあるので、これも探し出して
拝見した。

「京の宿—思い出すままに—」と題された本は、東京霞関ビルにて出版会を行われ
たようである。石田博英、屋合正治、辰己柳太郎、阿部友二等60人程の名士発起人の
名簿の中に川原田政太郎の名もあった。

そして「お会いしたお客様」と題する文中に次のように出ている。

昭和26年の早春の肌寒い日に知人の紹介で先生は始めて来られた。お酒がお好きで、
時々宿の者を連れて京の町でご馳走をされたり、お話はじつに豊かでした。

「わたしは金と女には縁がない。お酒と仕事わたしの恋人」とよく言われました。
又フランス語で *L'amour est plus fort que la mort* (愛は死よりも強い) と口ず
さまれることもありました。

ある夏上京し駒込の研究所に伺いましたが、白衣の先生が出てこられ、研究所を拝
見しました。夏でしたのに幽霊でも出そうな建物でした。そして浅草のどじょう屋へ
ご案内をいただきました。80才と思えぬ若々しさで、その後次々と浅草の店をご案内
していただきました。

この岡本女史からは先日暑中お見舞いを拝受したが、現在郷里の三重県海山町でご
健在のご様子である。(川原田)

第36回通信技術懇談会 (60・6・27) —— 続第5世代コンピュータ ——

今回は、第35回懇談会に引続いて第5世代コンピュータについての自由討議を行
い、各分野への波及効果に関する論議を深めた。

従来のコンピュータと第5世代コンピュータの差異は、従来のものがデータ処理を
ねらいとしているのに対し、第5世代コンピュータがマン・マシンの相互会話を行う
ことを可能としたものであり、これにより社会は新しい創造に向かって前進すること
になる。例えば、在来のコンピュータが数字や図形を扱う場合、その数字や図形の意
味を理解することは不可能であった。しかし第5世代コンピュータはこれが可能となり、
真の意味でのビジネス等の意志決定に活用され、各種プランニングそのものに効果
的に活用される。即ち、コンピュータが創造への参画を果たすことになる。また行政
等への利用は、その生産性を高めることが期待される。過去何百年・何千年もの間の
「行政」の問題解決の糸口が見いだされよう。

メーカでの適用例としては、現在は主に製造管理での活用にとどまっているが、複
雑な設計業務の省力化までは進められている。しかし今後は、「独創」の意味を我々
に反省させつつ、より合目的で合理的な「小さいsystem」設計を促進することになり、
「思考するコンピュータ」として企業展開の主要ツールとなる。

また教育面での利用は、多様な手段の提供が考えられる。児童教育から成人教育、
さらに高齢化に伴う能力再開発の問題にも良く適合した利用が可能となる。

即ち経済的な諸テーマの領域を越えて、「人」の生活に深く係わった形での人間生
活へのコンピュータの参加が出現する。多くの議論がでて問題意識もさることながら、
今後への期待を深めることとなった。(相原)

第37回通信技術懇談会(60・7・16)
——「未来適応企業」について——

A. トフラーは、1980年に出版された有名な「第三の波」において、来るべき社会の形を示す未来モデルを提示し、現代社会の分析と展望を行った。

その後 ATTの企業使命に関してのコンサルタント依頼に対し、トフラーが1972年に提出した秘密報告書を基とし、それに ATT解体後に書かれた彼自身のコメントを付した著書が先頃発表された。今回はトフラーのその所説を中心として、今後の企業経営の在り方について討議を行った。

ATTは大衆社会の中で今日の大を築いた。ATTの育った環境は大衆市場、均一の製品とサービス、長いアッセンブリー・ラインの時代——産業主義の時代であった。

1900年から1950年までの半世紀、ATTを支配したのは標準化されたサービスを普遍的に提供するという目標であった。そのような標準化は最終製品だけではなく、生産手段・流通手段・保守手段・各種サービス・企業の組織機構にまで及んでいた。

1950年代の中ばから起こったアメリカ社会の多様化は、消費者需要の多彩化・非標準化をもたらした。一方、テクノロジーの革新的な飛躍により、各種製品の非標準化も可能となった。超産業主義時代の始まりである。

アメリカの企業が直面しているイノベーションと企業内の生命力との関係を示すものとして、斬新比(novelty ratio)という概念が論議されたが、これは企業の古い部品と新しい部品の比で、製品・技術・従業員・規定・組織等に関し、その企業の新しさの指標となるものである。この考え方は、現代に於ける日本の企業経営にも適用しうるものである。

超産業主義時代においては社会はコンセンサスではなく、ディセンサスと価値観の多様化へと変化し、物質的価値体系から「脱経済的」価値体系へ移行する。産業主義時代の「規模の経済」の神話が崩壊する。「官僚主義(ビュロクラシーbureaucracy)は「間に合わせ主義(アドホクラシーad hococracy)」にとって代わる。この「間に合わせ主義」とは、一時的な作業単位の仕事を調整する機構で、環境の変化に応じ、適当に浮かんだり消えたりする。このような傾向は、プロジェクト・チーム等の一時的な作業単位の急増という形で企業の中に現れ始めている。

なおトフラーが超産業主義時代の ATTの理想像として提言するのは、複数の企業・機関よりなる企業星座(constellation)の頭脳中枢としての ATTであり、現在進行中の NTT民営改組に照らし合わせてみると、誠に興味深い。

また議論の中から、激動する通信産業各企業経営についての問題意識等の対応作は現実的には困難なものがあまが、解決に向かって前向きに努力することを心に刻んで議論を終了した。(相原)

第5回コデブテル連絡協議会(60・7・20~21)

本年11月にTTMM85が東京の笹川記念館で開催されることになったので、この会議に論文発表及び展示品を出すこととし、その取りまとめ方針について詳細な討議を行った。

又将来システムとして支援システム、運用対象の分析、具体的訓練の実施による評価等の調査研究を推進するためには、その推進母体が欲しいのでその一案を取りまとめた。これらは近く郵政省に提出し、その具体化を要望することとした。

なお、7月22日には、郵政省、日本ITU協会が主催して、「教育情報工学とコデブテル」と題して当所研究員佐藤隆博氏が講演を郵政省講堂で行い、本件に対する関係者の理解を深めた。

佐藤氏の考えておられる訓練開発のプロセスは大要次の通りである。

1. 事前調査分析システム

Job .Skill分析法
受講者分析法

2. 訓練教材データベース

データベースの種類
訓練目標
目標構造チャート
教材内容
試験、演習問題

訓練目標の構造的分析法
訓練コースのアウトライン設計法
テスト構成法

3. 訓練教材開発システム

システムの種類
記述、指示システム
マイクロコンピュータによる教材
マイクロコンピュータによるビデオ
教材作成システム
プリント教材作成システム

訓練内容のシナリオ化法
訓練教材の評価法
試験問題の作成法

第6回コデブテル問題協議会 (60・8・9~10)

11月に行われるTTMM85東京に論文発表と共に CAI教材開発技法の展示公開を行うこととし、その一部の作業を開始した。

実施の概要は次の通りである。

- 1) 完成済コデブテル手法教材の分析検討
- 2) 新提案方式による教材の作成
- 3) 鈴鹿学園教材の分析及び途上国向け教材へのガイドライン作成

受領資料

- | | | |
|---|--------------|---------------|
| 1. 電気通信国際協力動向調査報告書 | 60-7. | テレコム国際交流米国調査団 |
| 2. 日立 | 60-7. | (株)日立製作所 |
| 3. 東京工業大学百年史通史及び部局史 | 60-7. | 東京工業大学 |
| 4. 電気通信と国際協力 | 60-7. | 電気通信産業連盟 |
| 5. 教育情報工学とコデブテル (佐藤隆博氏) | 60-7. | 郵政省、日本 ITU協会 |
| 6. スギノニュース | 6.7. 60-7.8. | スギノマシン (株) |
| 7. フィリピン国における援助案件供与・実施過程に関する調査
(経済企画庁委託・野村総合研究所) | 60-8. | 当所評議員 富永英義氏 |
| 8. うおづ 85 | 60-8. | 魚津市役所 |
| 9. 思い出の記 | 60-8. | 菅原研究所社長 菅原重二氏 |

電磁応用 第15号

昭和60年9月1日

編集発行人
発行所

川原田安夫

〒107 東京都港区南青山5-1-10-808
電話 東京 (03) 499-1888